

## 中在家南遺跡第 13 次調査の成果について

### 1. 調査要項

調査地点 仙台市若林区荒井 1 丁目 14-9 調査期間 令和 5 年 10 月 2 日～12 月 5 日  
調査面積 144 m<sup>2</sup>

### 2. 調査概要

共同住宅の建築に伴い、若林区荒井に所在する中在家南遺跡で発掘調査を実施した。遺跡は、仙台市地下鉄東西線六丁の目駅から南に約 1 km の地点に位置している。遺跡は現海岸線から約 4.5 km 内陸側に発達した自然堤防及び後背湿地にかけて立地しており、現在も南側には水田地帯が広がっているが、昨今は宅地化も著しい。

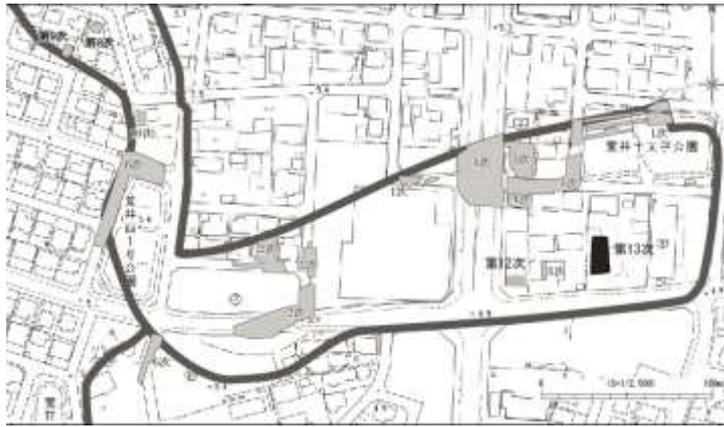
遺跡の付近は弥生時代から近世にかけての遺跡が集中しており、遺跡の東側には奈良～平安時代の水田跡である仙台東郊条里跡、西側には弥生時代の水田跡である押口遺跡や荒井南遺跡、杓形遺跡などが代表的である。また、南東には中世城館である長喜城跡が存在する。

中在家南遺跡は平成 8 年の発掘調査により、河川跡から多量の弥生土器や農具などの木製品が発見され注目を集めた。河川跡に堆積した泥炭質粘土に覆われたことで、土器や石器以外に木製品や骨角器などの脆弱遺物までもが良好に遺存しており、弥生時代から古墳時代にかけての物質文化が解明されたことは大きな成果である。平成 15 年には出土遺物の一部が市指定有形文化財に指定されている。

今回の調査は、遺跡の南側を対象に調査を行った。その結果、近世の溝跡と古代～中世頃と考えられる溝跡、ピットなどが発見された。また、主に古代～中世の溝の堆積土から、土師器や須恵器、瓦質土器を中心に古代～中世の遺物が多量に出土した。

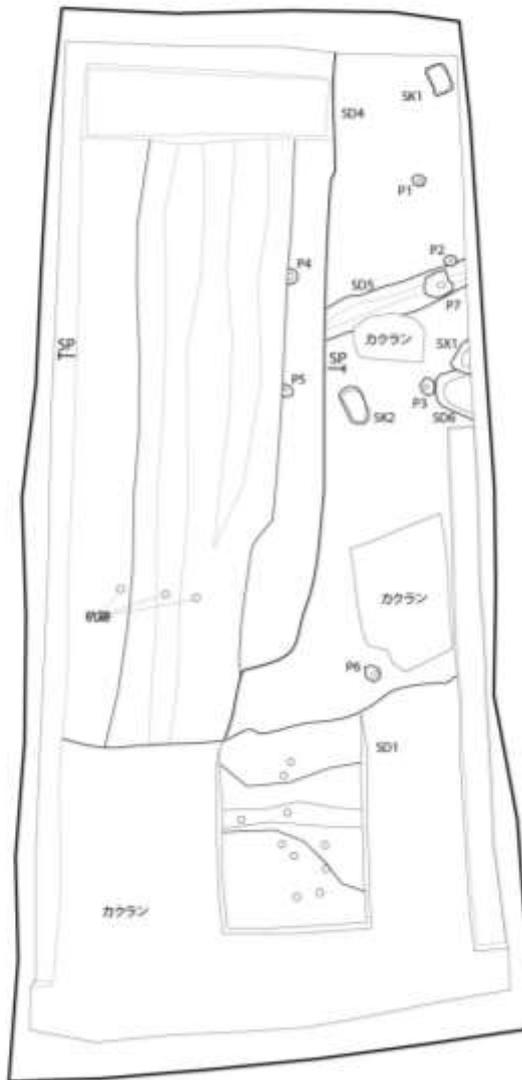
古代～中世の溝跡堆積土の最下層には十和田 a テフラと推定される灰白色火山灰が混入していることから、掘削された年代 10 世紀前葉頃であり、上層ほど中世の遺物が含まれるため長期間に使用された後に埋没していったものと考えられる。今回の調査で、中在家南遺跡における古代から近世にかけての人々の連綿とした活動の痕跡が新たに発見されたことは非常に有意義である。





遺跡位置図

X=195185.897  
Y=8968.911



X=194213.089

調査区平面図



遺構検出写真（直上から・右が北）



溝跡（近世）検出状況（東から）



溝跡（中世）完掘状況（南から）



瓦質土器出土状況（北から）



須恵器出土状況（北東から）